

令和元年 7月5日

～地元初公開予定の弘福寺の絵画をパネルでいち早く紹介します～ **パネル展「牛頭山弘福寺の絵画」7月6日より開催！**

区では、7月6日(土)から、ひきふね図書館(京島1-36-5)でパネル展示「牛頭山弘福寺の絵画」を開催する。これは、7月20日(土)からすみだ郷土文化資料館で3期にわたって開催する企画展「黄檗(OBAKU) - 牛頭山弘福寺の絵画と墨蹟 - 」において黄檗宗牛頭山弘福寺(向島5-3-2)が所蔵する江戸時代の絵画や墨蹟が地元で初めて公開されることに先立ち、主な絵画を画像パネルで展示するもの。

今回のパネル展示では、弘福寺が所蔵する近世絵画19点を紹介。特に注目の展示物としては、江戸時代の日本に黄檗宗を伝えた隠元隆琦を含む三禅師を描いた「隠元木庵鐵牛三禅師像」(喜多元規筆)。これは、弘福寺にとっては開山鐵牛禅師につながる宗祖からの法の流れを示す重要な肖像画であり、各作品ともに陰影が強く、人物の特徴を強調し鮮明な色彩を用いた表現が印象的である。他にも珍しい作品として羅漢たちの僧院での暮らしを描いた「絹本着色五百羅漢図(経蔵)」は、中国南宋時代の僧院生活の様子が描かれており、経典を収納する蔵から経箱を出し入れする羅漢や経典を返却に来た羅漢などが描かれている。他にも、羅漢たちの不思議な法力を表す題材の「絹本着色五百羅漢図(争龍)」など、弘福寺の絵画パネルを通じて墨田区の歴史の知られざる一面を知ることができる。本パネル展は7月17日(水)まで開催する。

区の担当学芸員は、「今まで公開されることが少なかった絵画をパネルで展示している。パネル展を見て、黄檗文化に興味を持っていただいて、20日(土)から開催される企画展でぜひ、本物の絵画を見て、そのスケールを感じて欲しい」と話している。



パネル展示「牛頭山弘福寺の絵画」

開催日時：令和元年7月6日(土)～17日(水) 午前9時～午後9時

7日(日) 14日(日) 15日(月・祝)は午前9時～午後5時

会場：墨田区立ひきふね図書館(京島1-36-5)・2階プロジェクトコーナー

7月12日(金)午後2時～3時は担当学芸員による展示解説も行う予定

《資料》パネル展示「牛頭山弘福寺の絵画」チラシ

《問合せ》地域教育支援課 5608-6310

<黄檗文化について>

今から365年前の承応三年(1654)7月5日、中国僧 隠元隆琦(いんげん りゅうき)(1592~1673)は弟子たちとともに長崎に入りました。隠元は、のちに黄檗と呼ばれた当時最新の禅を伝えただけでなく、インゲン豆や煎茶、書や絵画、建築など幅広い文化を伝えました。私たちが目にする明朝体と呼ぶ書体も彼らが持ち込んだもので、私たちの身近な暮らしの中には気がつかないところに黄檗文化が溶け込んでいたともいえるのです。江戸時代に鎖国が始まって20年ほどして伝わった黄檗は、新しい文化を渴望していた大名や貴族たちに受け入れられ、急速に広がりをみせたといわれます。

<牛頭山弘福寺の歴史>

隠元には数多くの弟子がいました。その筆頭にあげられるのが木庵性瑫(もくあん しょうとう)(1611~1684)です。木庵は、九州から関西、さらに関東へ黄檗寺院が江戸にも開かれていく中で、そのトップに位置した瑞聖寺(現港区)を開きました。その木庵から法を継いだ日本人の中に鐵牛道機(てつぎゅうどうき)がいました。鐵牛は長門国(現山口県)の出身で、隠元の来日を知り長崎に赴いた僧で、隠元に参じた後、木庵の弟子となりました。牛頭山弘福寺は、現在の地(向島5-3-2)に延宝2年(1674)開創しました。開山は鐵牛道機、開基は小田原藩主で幕府老中も務めた稲葉正則で、伊達綱村や井伊直武ら大名たちが仏堂や仏像などを寄進したと伝わります。